



京都産業大学 ことばの科学研究センター 2021 年度 第 3 回研究会

9 月 29 日（水）15:00～17:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

『日本書紀』区分論と聖徳太子 森 博達

（ことばの科学研究センター 研究センター員・京都産業大学名誉教授）

今年は聖徳太子薨去 1400 年の大遠忌に当たる。太子の事績は『日本書紀』（720 年撰）に多く載せられている。今回の発表では、『日本書紀』区分論の視点から太子の事績の虚実に迫るとともに、推古朝の特質に言及したい。【参照】聖徳太子シンポジウム—聖徳太子信仰と伝承—（パネルディスカッション） - YouTube

・『日本書紀』30 巻は漢文で書かれているが、表記の性格によって、α 群・β 群・巻 30 に三分される。α 群は漢字の中国音で正格漢文によって綴られ、β 群は漢字の日本音により和化漢文で書かれている。また編修の最終段階で、α 群を中心に潤色や加筆が行われた。

・聖徳太子の初出記事は、α 群巻 21「崇峻紀」の蘇我物部戦争であるが、書紀区分論から見て編修の最終段階で書き加えられたものと推測される。

・β 群巻 22「推古紀」の「憲法十七条」は倭習満載で、その倭習は β 群の倭習と共通する。飛鳥時代に原形があり、「推古紀」の述作者が潤色・修文したものと考えている。

・推古朝の統治は仏教が背景にあり、菩薩天子たる梁の武帝や昭明太子がロールモデルとなった。仏教文化は梁⇒百済⇒飛鳥というルートで導入された。推古朝では天文観測が行われ、史書の編纂にも着手した。太子は蘇我馬子と協力して天皇を補佐し、隋や高句麗に劣らない独立国家の建設を目指した。



オンラインによる参加の場合のみ center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp へメールでお伝えください。